投稿誌『わいふ』50 年の軌跡
～半世紀に渡る女性たちの意見をまとめたアーカイブとしての意味～

豊田　雅人
TOYOTA Masato

1. はじめに

筆者は、この 50 年間続いている『わいふ』という投稿誌の分類を通じて何故この冊子だけが今も続いているのかについて研究している。何故ならば 1975 年前後に花開いた様々な女性運動を扱った雑誌類が、ある場合は資金難で、またある場合は内部分裂で尽く廃刊の憂き目に遭っている中、大口の資金元も無いにも拘わらず未だに一定数の読者を抱えているからである。

これは昨年同じく投稿誌『あごら』が休刊された経緯(1) を見ても明らかなように、読者層の新陳代謝が落ちてきたことも大きい。ところが『わいふ』は世代を超えて今も新陳代謝を続けており、従って現在も公称 2,000 部の定期購読者を抱えて運営されているのが事実である。こうした事情を踏まえ、本稿では『わいふ』が今に至っても発行されているという事実と投稿者の問題提起について分析を行う。

翻ってみれば戦後の激変が女性の地位向上に与えた影響は計り知れないとはいえ、労働環境までは完全に変わったとはいえない（山中 2011：33）(2)。

これは戦後の日本の労働環境も戦前から引き継いた形で女性は一旦就職しても、程なくして結婚と妊娠を理由にして退職し、子育てが一段落ついてから改めて再就職するという形の労働体系をとったからで、巷間にも「M 字カーブ」として知られている現象である。しかし、ここにこそ現在における問題が潜んでいたというべきである。今日の晩婚化や就業環境の激変はいきなり降って湧いたように起こったわけではないからである。まず女性の高学歴化にも目を向けなければならない。例えば橋本健二によれば 1965 年前後における高度経済成長期の大卒ホワイトカラーは未だ少数で、大卒者は男女合わせても約 13 万 5 千人であり、被雇用者に占める割合にして男女を含めても 9.1 パーセントを占めたに過ぎないとする。1960 年代中期までは、まだ中卒の単純労働者が雇用主から重宝がられていた（橋本 2010：30）(3)。

そのような 1963 年、高度経済成長期に日本中が沸き立っていた最中の兵庫県宝塚市に造成された仁川（にがわ）団地に住む主婦たちの間で、一冊の投稿誌が創刊された。『わいふ』と名付けられたその第 1 号(4) は、会費月 50 円手書きのガリ版刷りで作られたページ数わずか 14 ページという正しく手作りの投稿誌であった。

『わいふ』についての先行研究は高橋裕子『1946 ～ 50 年生まれの女性の「自分探

し」』[5] があるが、同論文は初期の『わいふ』（以下：『わいふ』（宝塚）と表記）編集部内での軋轢や廃刊の危機について述べつつも、その考察は主に読者の側に焦点が当てられているところから、作り手と読者層の世代が異なる点について多くは触れられていない。そこで本論では更に東京に引きつがれて変貌を遂げ今に至っている『わいふ』（現在の誌面タイトルは『Wife』）が半世紀に渡る主婦の主張を記録したアーカイブとしての存在であるという点を、紙幅の都合から宝塚時代の初期『わいふ』の投稿の傾向を軸に論を進めていきたい。従って 1975 年以降の東京に編集機能を移して『わいふ』を再開した点については他日に譲りたいことを予めご承知おき頂きたい。

また今日の個人情報の取り扱いには慎重を要する点に鑑み、一次資料では実名表記である投稿も編集部関係者以外の引用に際しては投稿者の氏名は全て仮名とする。

まず『わいふ』という投稿誌が誕生した背景を述べるにあたり 1955 年に日本住宅公団が発足して、団地化が始まった歴史を抜きには語れない。

仁川団地は従来思い浮かべるような長方形型だけではなく凸型の斬新なデザインを持つ住宅棟も立ち並ぶ団地であった。それでも団地化は各家庭の生活の均質化をもたらした。電化製品の拡充、消費の形態どれをとってもである。部屋の間取りにしても、いかに居住者が工夫を凝らし個性を出したつもりであっても同じ間取りである以上、寝室や居間を飾り立ててもほとんど変わらない。しかも公団の応募規定によって住む人の収入や生活水準までも一定のものにならざるを得ない。

1968 年の『ウルトラセブン』に「あなたはだぁれ？」という作品があるが、住民が夜中にそっくり宇宙人によって入れ替えられてしまったという筋書きで、たまたま帰宅が深夜になった住民だけが入れ替えられなかったことが発端となって真相が突き止められるというエピソードがある[6]。なじみの風景にもかかわらず、家族はおろか隣の住人さえも自分を知らないという状況に愕然とする、その深夜の帰宅者から透けて見えるのは、団地の機能性が画一性そして各家庭・個々人の生活までもが、孤立と画一化を含んでいるという事実をあぶりだす演出となっていたと考えることもできる点で興味深い。

ところで『わいふ』創刊の前年の 1962 年は日本の米の個人消費量が戦後最高（一人当たり 118.3 kg/ 年）を記録した年である。ちなみに 2010 年度は一人当たりの年間消費量は 59.5 kg/ 年である[7]。原田信男によれば、米の収穫量の方は 1967 年に史上最高の 1,445 万トンを記録したが、皮肉にも「戦後における西洋食改善運動が盛んになると、米食偏重の是正が叫ばれるようになった。そして米の消費量は 1962 年をピークに減少の一途をたどることになる」（原田 2013：9）[8] と、食文化そのものが大きく変化を遂げた時代でもあったのは、年間消費量を見ても明らかである。『わいふ』は文字通り「米が腹いっぱい食えるようになった」翌年に産声を上げたことになる。従って戦後日本の復興（復旧ではない）と切り離して考えることもできない。食えるようになったからこそ問題意識が出現したからである。

それは日本全体の貧困問題が解決しないまでも飢餓からの脱出が、夫の帰りを待ち家事をこなし子供を育てるという「終わりのない日常」の始まりでもあったからである。特に団地の生活がそうであったことは先述した通りである。そのひとつの解決策として『わいふ』が産み落とされたと見ることもできる。

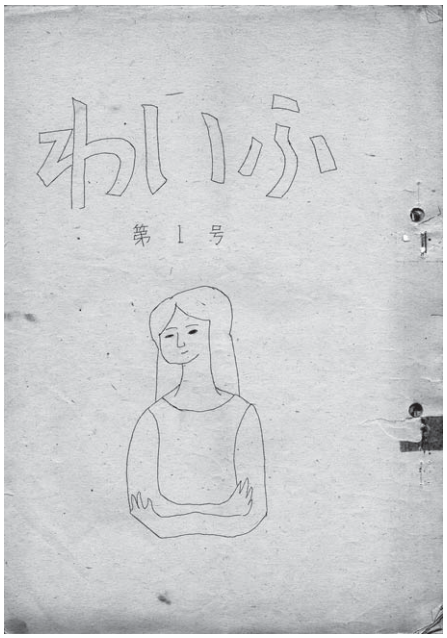
2. 宝塚『わいふ』の誕生

創刊当時の編集長を務めたのは高木由利子氏（以下：敬称略）で、夫婦ともに中学校の教員であったのだが、結婚と妊娠を機に学校教員を退職した当時 24 歳（1939 年 1 月生まれで学年では早生まれということになる）の女性であった。彼女の軌跡は先述した「M 字カーブ」における最初のピーク時の初期にあたる。彼女の焦燥感も、生活は安定しているが満たされない日常、そこから『わいふ』が生まれたと見るのは想像を待たないが、それについて高木は「長男が生まれて保育所がないため、やむなく勤めをやめて団地の白い壁に囲まれた部屋の中で、家事と育児に振り回されていた二十四歳のとき」（真野 2013：5）[9] であり、「あのころの私は自分一人とり残されていくようなあせりを感じて、なんとか外界と接する手だてを、必死で探していたような気がします。猛烈に自分の思いを吐き出したい欲求に突き動かされていました。（……）せめて日常思っていることを書きあったら、と友人に呼びかけると、たちまち賛同者が現れ、わいふが生まれたのです。」（真野 2013：5）[10] とも述べている。従って編集長は高木が務めることとなったのも自然な流れである。

加えて高木は筆者の質問に「当時は毎日の中で、広告の裏でも良いから何か書き散らしてみたいほどの自己表現の機会が欲しかった。」とも語っている。何かを綴るというのは鶴見和子が 1950 年代に提唱した生活記録論にも通底する欲求でもある[11]。和田悠が 1953 年 1 月の『思想の科学』の「発刊のことば」について触れ、「思想が組み立てられ、それが民衆に配給されるという考え方、学者が『啓蒙』というコトバを口にするとき、こういう考え方が含まれていると思うのですが、それに反対します」（和田 2003：80）[12]。敢然と反対表明しつつも、実際の綴り方運動に対しての距離はあくまで記録運動対象者に対する第三者的視座を離れず、「啓蒙というコトバに反対します。」としていたにも拘らず「鶴見（和子：引用者注）の意識においては、参加者の一人として、「友だち」として生活記録運動に関わっていたのであろうが、しかしながら〈生活の組織化〉の思想のレベルで言えば、「ひとびとの哲学」の反省以前と以後とではその行動様式は連続していると思われる。」（和田 2003：81）[13] と鋭い指摘をしている。『わいふ』が鶴見の生活記録運動と大きく異なる点は高木編集長も含め、会員全員が投稿者という立場であったという所である。

『わいふ』という雑誌タイトルについて高木が後年語った言葉によると、「当時アメリカの有名写真雑誌であった『LIFE』から『WIFE』にかけた」と述べており（真野 2013：9）[14]、また嫌々結婚をした訳ではないことも高木は強調している。『わいふ』創刊号の巻頭辞からも「お互いに大好きな彼と結婚できて、私たちは女の幸せをつかみました。でも、結婚したり子供が出来たりして、家の中にひきこもった状態となり、外との接触が無くなってしまいました。（……）いつもなら、そのまま忘れてしまうことも多いのですが、そんな心に浮かんだ事項を書きとめ、発展させて、皆と話し合ったらどんなに良いでしょう。」と記されていることからも見て取れる[15]。ちなみに見合い結婚に対して恋愛結婚が上回ったのが 1967 年であるから、彼女たちはかなり先を行っていたとも言える[16]。

写真　宝塚『わいふ』創刊号（1963 年）



しかし、だからこそ彼女たち団地に暮らす専業主婦には言いようのない欲求、それも知的欲求と自己表現への「自分探し」が芽生えたのである。更に保育所の不備が彼女たちを職場から専業主婦へと向かわせて行った点にも注意を要する。以後の『わいふ』（宝塚時代）も保育所作りへの取り組みが頻出する。しかも現実に公立保育園の設置を実現できたのであるから評価するべきある。この点では名古屋の保育所作りに奔走した人びとを考察した伊藤康子「地域女性の生活と社会運動」の動機とも通じる点がある（伊藤 2012：127）[17]。しかも共同保育への運動に特化していった名古屋に比べて投稿誌を使っての地域を超える運動体として連帯の環を広げていった高木の先見性は、当時の好況に沸く日本において各地で起こった読者の夫の転勤に端を発したものであったにせよ、全国的な広がりを見せたことで今日のソーシャルネットワークにも通じる点もあった。問題は、お見合い結婚であれ恋愛結婚であれ、女性は仕事を辞め専業主婦になったらそれで終わり、という点である。高木の焦燥感もこの点を鋭く付いている。以降の『わいふ』は高木の時代から既に家庭生活の改善（家事の効率化）に眼目を起きつつも、主婦の再就職をテーマ（本稿では専業主婦に対して職業を持つ主婦を兼業主婦と規定する）としていくのも、この為である。

しかしそもそもの動機が知的欲求の発露と「自分探し」であるとすれば、脆さも同時に孕んでいたのは言を待たない。そこで投稿誌『わいふ』の脆さと、しなやかさはどこにあったのか、節を改めて述べて行きたい。

3.　宝塚『わいふ』の可能性と限界

ここで宝塚時代の『わいふ』（1963–1974）に掲載された投稿の傾向について述べる。創刊の喜びに満ち溢れた第 1 号に続いて第 2 号[18] では既に育児の問題提起がなされている。「おばあちゃんと孫」と題された投稿には出産した女性が働くためには、孫可愛さに任せて祖母に育児を頼む心苦しさを「近頃の共かせぎの大部分は、こうしたおばあちゃんの犠牲の上に成り立っている場合が多いのではないだろうか。安心してあずけられる保育所がほとんどないという現状が、おばあちゃんという安易な、弱い立場の所にしわよせされているようです。女性にとって育児は生涯の大きな仕事であることは確かだが、せめて老年には育児から解放されて、第二の人生を楽しみたいと思うのは私一人ではないでしょう。そのためにも保育所づくりの運動を大いに進めていきたいものです。」と保育所作りに目を向け始めている（わいふ 1963：11）[19]。それにつ

いて翌月発行の第 3 号に「私もその一人、おばあちゃんの犠牲の上に、今も勤めをしている私。」という意見投稿が掲載された（わいふ 1964：14）[20]。この投稿では続けて「「お婆ちゃんと孫」という面ではＫ女さんの書かれている様に、安心して預けられる保育所が出来て、子供を育てたら働ける。又、子供が出来ても、その間育児に当たっても子供が大きくなり親の手を離れる様になれば、又働くことができる職場が待っている。そういう時代に移り変わる過程が、今の（おばあちゃんの犠牲の上に成り立っている共かせぎ）状態なのではないでしょうか。」と女性の就業の難しさをここでも吐露している。創刊直後から保育所の必要性に触れつつ尚、職業意識の高さもうかがわれる投稿になっている。ハケ口を求めていた高木の意図とは離れ、『わいふ』は益々保育所作りへと目を向いていったことがわかる。後年に子連れ出勤の是非をめぐるアグネス論争へと発展する問題は 1960 年代前半からの問題であったのである。また『わいふ』では早い段階から公害、食品添加物への厳しい眼差しを向けつつあった。1964 年 1 月発行の第 3 号では、夫から手渡されたパンフレットを見た主婦（どのようなパンフレットであったかは不明）が、その脱脂粉乳（スキムミルクのこと：引用者注）の品質に慄然として投稿したわけである。それが、「かわいい子供の命をむしばむという事（その一）」という投稿である（わいふ 1964：3）[21]。これは 1960 年代半ばまで学校給食で供された脱脂粉乳に含まれる放射性物質の危険性について書かれた投稿である。時代はアメリカ・ソ連両陣営による核開発競争の最中にあっただけに人ごととは思えなかったのではないかと考えられるが、同時に 3.11 の大震災と原発事故を経験した今日の我々にとっても同じ恐怖が付きまとう問題である。脱脂粉乳については第 9 号で「金曜会の報告（3）― 敗戦と占領のいけにえ ―」というタイトルで再び問題提起され、戦後に無償で日本に届けられたと思われがちであった脱脂粉乳がガリオア資金によるものであり、1962 年に池田勇人政権下で償還を行うことを決定したことはおかしいのではないかと触れられている[22]。何故ならば自分たちはガリオア資金で配給されたものを日本政府が決めた対価を支払って購入したのに、再び税金で償還するのは国民にとっては二重支払いになるという趣旨の発言であった。しかし大方の人々はあの時の物資をそもそもはアメリカからの無償の援助だと理解している人は少なくなかったはず、というように彼女たち会員は数こそ少数ながら、極めて政治的意識が高かった。創刊まもなくから既に単なるハケ口ではなかったのである。ここには専門家や当時の思潮をリードした「進歩的文化人」と呼ばれた人々ではない、市井の主婦たちの生活防衛意識と日常のリアリティが強く現れている[23]。

生活防衛意識は食生活にとどまらない。『わいふ』67 号、1969 年 5 月号では「ぬかみそ教室」というコラム欄で、学校教科書の中で扱われるアジア・太平洋戦争の記述の簡素化について問題提起をしている。それは 1958 年の小学 6 年生用の歴史教科書の記述にあった原爆犠牲者の記述がそっくり削除されている点である。1958 年の段階では「とうとう広島と長崎に原子ばくだんが落とされて、三十万あまりの人々が、痛ましい死をとげました。」とあった記述が同じ教科書会社の記述にも拘らず「その年（1945 年：引用者注）の 4 月、アメリカ軍はついに沖縄に上陸し、広島と長崎に原子ばくだんをおとしました。」と簡素化されているのである。1958 年版にはあった学童疎開や勤労動員の記述もそっくり削除された教科書によって、戦争の記憶が既に風化

しつつある状況に危機感を持っている。投稿者によれば「アンネ」と聞いても生理用品しか思いつかないし、「修学旅行で長崎の原爆資料館の陳列品を見たとしても「わあ、気味がわるい！」というあっさりとした表現で済んでしまいがちです」（わいふ 1969：4）[24]。とし、さらには戦艦大和の格好良さや武装の凄さに目を奪われ、そこで命を散らせた人びとへの思いまでもがなくなってしまう。といった記憶と体験の齟齬について述べている。体験から記憶へ継承することの難しさは、ポール・トンプソンも指摘する通りである（トンプソン 2002：238–241）[25]。

時折しもミリタリーブームが湧き上がり、戦争の悲惨さよりも兵器への憧れが子供たちの心を捉え始めていた時期であったことから、なおさら危機意識を持っていたと考えることもできる。『わいふ』は初期から既に戦争の記憶と今日の我々ですら直面している「記憶の伝承」について問題意識を発信していたのである。またこの 67 号では当時同志社大学講師であった土井たか子（1928– ）が登場し、「土井多賀子さんを囲んで」という講演も収録されている[26]。土井も当時は『わいふ』の会員の一人であったのである。内容は次期衆院選挙に立候補することを前提として、自分の政治理念がどこにあるかを会員にも知って欲しいとして北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）領域内に侵入したアメリカ偵察機撃墜と安全保障の話から始まり、日本はあくまでも非戦を貫くべきだと説き、また教育の学歴偏重と国公立と私大の大学間格差、更に貧困によって進学を諦める人への救済策を述べた。土井はこの年に行われた第 32 回衆議院総選挙に日本社会党から立候補して初当選をしている。宝塚の『わいふ』は政治家まで会員に擁するほどの力を蓄えていたのである。

しかしあくまでも「自分探し」から生まれた『わいふ』（宝塚時代）の廃刊危機は意外なところから生まれた。それは『わいふ』10 周年記念号を作ろうと思い立った高木の疑問からであった。高木は自身を一投稿者として綴ったエッセーを載せている[27]。

加えて高木自身が『わいふ』の拡充並びに印刷経費節減を目指すことと、主婦の自立を目論んで印刷会社を設立したことが、彼女に予想以上の経済基盤を与えたのみならず、専業主婦ではなくなった点も大きいと考えられる。高木は晴れて兼業主婦となったのである。

これは『わいふ』（宝塚時代）の他の編集部員についても同じである。奇しくも創刊から 10 年「M 字カーブ」の次の谷に彼女たちは差し掛かりはじめたと考えることもできる[28]。「十年一日」のような状況に加え、日々多忙を極める印刷業の狭間で高木は「虚しい」を連発しつつも、尚 1 年半『わいふ』の刊行を続けたが、ついに「廃刊宣言」を載せることにした。そもそも高木自身が廃刊宣言で「わいふの生まれた動機というものが、そもそも、育児にかかりっきりで、物理的に（或は精神的にも）家の中のとじこめられた若い主婦が、なんとか自分たちの思いのハケ口を求めた所から始まったのであり、それ以上のものでも、以下のものでもなかったと思います。（……）」と正直に述べている（わいふ 1993：54）[29]。このハケ口以上でのそれ以下でもないという正直な内面吐露に初期の『わいふ』の可能性と問題点が同居していると言って良い。

では廃刊の危機に見舞われた『わいふ』がどのように続けることができたのであるか、ここで節を改めてまとめとしたい。

4. むすびとして

一旦は高木の意思によって廃刊を宣言した『わいふ』であったが、一読者から廃刊を惜しみ、自分が引き受けるという申し出が起こった。それが新生『わいふ』の始まりであった。高木自身も生き残りの策を講じて読者アンケートを通じて引き受け手を探していた矢先のことであった。

この点は見田宗介の「社会意識」についての見解に大きく依拠できる現象でもある。つまり見田の言う「ある社会集団の成員に共有されている意識」が時に世代を隔て、時に世代を縦断することになるからである。高木自身は（『わいふ』の出版活動を）辞めるといった。それは彼女自身が経済的基盤を持つ印刷業者になれたことが大きいばかりか、公立保育所の設置も叶ったからでもある。しかも事業が順調なことで、却って『わいふ』の出版事業が重荷になってしまっていたとも筆者の聞き取りで回想している。10 年を経た彼女にとって『わいふ』は自己表現の場としての役割を終えていたのである。

同時に、『わいふ』は「自分探し」や「保育所設置」といった生活改善運動から世代を超えて大きく発展を遂げる可能性をもたらすこととともなったのである。つまり熱心な読者から「『わいふ』はあなた（高木）一人のものではない。」と続行を望む声が多かったのも、世代を縦断したテーマがあったからであった。そして『わいふ』は「啓蒙」という言葉に抗しつつもその色を払拭できたとは言い難い鶴見和子の生活記録運動とは異なる意味で生活史、世相史を半世紀にわたって残すこととなっていくのである。1960–70 年代に『わいふ』に投稿していた市井の主婦たちの自己表現は（直接の接点はなかったにしろ）鶴見等の限界を遥かに超え、高木たち『わいふ』当事者が思い描いた初期の意図をも離れていたのである。換言すれば投稿者の教育レベルの向上も大きいと言わざるを得ない。それは「M 字カーブ」のエッジが一番深い世代、すなわち団塊の世代の専業主婦が発言の中心となっていたことを意味する。

本稿で述べたいのは『わいふ』は決して専業主婦のはけ口投稿誌で終わらなかった点である。思いついたテーマを定め、それについて日々の生活の感覚から感じ取った疑問点として書き記し、それについて賛成反対それぞれの意見を述べる。場合によっては論争になる場合もある。とはいえ宝塚時代は人数も少なく最盛期でも 200 人前後であったため極限られた論争や意見交換にとどまった。むしろ東京に移ってからの『わいふ』で更に鮮明になっていったのは決して偶然ではない。なぜならば高木は虚しいと述べたくり返し提起される問題意識は、世代間を通して見た場合、常にブレない問題提起であったことを証明してくれたからである。筆者は戦後女性のクロニクル、そしてアーカイブとしての『わいふ』の証言分析研究を今後も続けていきたい。

高木は関西言葉で「何も変わらへん」と嘆いたのであるが、問題が変わらないのではなく、何故変わらない問題があるのかが重要なのである。次回に東京で再生した『わいふ』（以下『わいふ』（東京第 1 期））及び現在の立川の『wife』（以下『わいふ』（東京第 2 期））で展開された論争について述べていく中から、変わらないで今に持ち越されている問題についての考察を約することで本論の締めとしたい。

■註

(1) 『あごら』購読者のサイト「手持ちの時間を大切に」に「会員制女性誌『あごら』の休刊と斎藤千代さん」と題して休刊の経緯が載せられているが、主筆の斎藤千代氏の高齢化と財政難に加え、読者の高齢化が挙げられている。これを批判的に捉えれば『わいふ』とは異なり『あごら』は読者の新陳代謝が低かったことも否定できない。

(2) 山中恒、2011、『昔ガヨカッタハズガナイ』勁草書房、によれば、明治の近代化以降、日本の女性は平塚らいてうの『青鞜』にかぎらず、政治面では市川房枝の普通選挙権獲得運動などといったように、女性の権利獲得と解放運動、婚姻制度、財産相続、選挙権のみならず、労働環境の改善など多岐にわたるものであった。周知のように太平洋戦争は女性の職場を大きく拡大させた。しかし男女の賃金格差を肯定し法定化するなど、男女の職場環境における性差別が著しいものでもあった

　山中は同書で「長いこと日本では、本末思想を引っ張りだすまでもなく、男女間に賃金差があって当然と思われてきた」(33 ページ) と論じ、太平洋戦争下の勤労動員の制度化は一種の事後承認にすぎなかったと示唆を与えている。

(3) 橋本健二、2010、「一九六五年の日本」『家族と格差の戦後史』所収

(4) 『わいふ』第 2 号 1963 年 12 月 20 日号

(5) 高橋裕子、2005、「1946 ～ 50 年生まれの女性の「自分探し」」『立命館産業社会論集』所収

(6) 『ウルトラセブン』第 47 話「あなたはだぁれ？」、1968 年 8 月 25 日放送より。この作品は朝の団地の出勤風景と深夜の静寂という状況が、人びとの生活までもが個我を持っているつもりでいて、実は乖離している点を突いた作品である。

(7) 「年表でたどる食事情」『VESTA　2013 年夏号』、2013、4 ページ所収

(8) 原田信男「日本人とコメ」『VESTA』前掲書、9 ページ所収

(9) 真野、前掲書

(10) 真野、前掲書

(11) ただし和田の眼目があくまで「鶴見和子と野間宏の（……）1950 年代の時代的文脈のなかで知識人として検討することにある。」のに対して本稿は『わいふ』投稿者が高等教育を受けた女性たちに限らない主婦の声を様々な当時の年齢層から半世紀に渡って拾い上げていった点に重きを置くのみならず、基本は正・副編集長を含めて全員が投稿者という立場で意見を述べているというユニークさにも眼目を置いた。

(12) 和田悠、2003、「1950 年代における鶴見和子の生活記録論」『社会学研究科紀要』第 56 号所収

(13) 和田、前掲書

(14) 高木によれば「その頃、アメリカで『LIFE』という雑誌があってね、それにかけたんです。でも横文字じゃなく、もっとぬかみそ臭いのがいいかな、とわざとひらがなに。」とも語っている。真野由美子、2013、「Wife 50th “伝説の人” に会う」『Wife 2013. JULY』、No.361、9 ページ所収

(15) わいふ宝塚編集部編、1963、『わいふ』第 1 号 11 月 20 日号、見開き

(16) 国立社会問題研究所編、2002、「結婚年次別にみた、恋愛結婚・見合い結婚の構成比」『出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）』所収
http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou12/doukou12.pdf

　なお、同調査第 13 回（2005 年）、第 14 回（2010 年）では、お見合い結婚か恋愛結婚かの別を示すグラフがなかったために、便宜を考え第 12 回を使用した。

(17) 伊藤泰子、2012、「地域女性の生活と社会運動 ― 名古屋の保育所づくりを中心に ―」『シリーズ　戦後日本社会の歴史 3　社会を問う人びと』所収

　しかし伊藤は「保育園に子供を育ててもらって退職しない生き方がうらやましい。」とい

う反感を受ける主婦がいたことなどを挙げ、名古屋の事例は並々ならぬ苦労があったと記している。

(18)『わいふ』第 2 号 1963 年 12 月 20 日号

(19)『わいふ』第 2 号 1963 年 12 月 20 日号

(20)『わいふ』第 3 号 1964 年 1 月 20 日号

(21)「この脱脂粉乳というのは、牛乳からバターを作ったカスの粉乳ミルクのことなのです。」と書き出し、「カスゆえに滋養に乏しく蛋白質のみの貧相で腐りやすく異臭を放つ飲料、アメリカでは家畜の餌として用いている脱脂ミルクを子供の学校給食に用いているのです。(……) その上最もいやなのはアメリカ・カナダにおいては放射能がすごく多いので、もちろん牛乳の中にも含まれているわけです。ところがこの牛乳中の放射能は、ほとんど脱脂ミルクに移行するので、この輸入制ミルクにはストロンチウム 90（これはカルシウムにつくので骨をおかす）や、セシウム 137（筋肉、内ぞう、生殖腺をおかす）等が含まれている。これがかわいい子供たちの給食として強制的に飲まされているのです。」というように放射能（今日では放射性物質）についても既にかなりの知識を得ている点に加え、今日の学童給食をめぐる学校と親の対立との相似性には驚かされる。

(22)『わいふ』第 9 号 1964 年 7 月 20 日号。

『わいふ』文中では「ガリオア資金」とあったが、これは日本に対する敗戦後の経済復興を図るものとしてアメリカ陸軍省の予算から計上された経済援助である。特徴としてはヨーロッパへの経済援助であったマーシャル援助がドル建てであったのに対し、ガリオア資金は物資の直接提供であった点にある。さらに実質は返済義務を伴う借款であった。詳しくは油井大三郎・中村政則・豊下楢彦編、『占領改革の国際比較 : 日本・アジア・ヨーロッパ』、162–192 ページを参照されたい。

(23)『わいふ宝塚』では「金曜会」という勉強会を定期的にもっていた。そこで敗戦直後の食糧援助の一つであるガリオア資金と食糧の配給について勉強会を行っていたのである。

この参加者の一人が当時日本はガリオア資金で用意されたはずの食糧はただで配られたわけではなく、対価を支払っていたこと。それにも拘らず 1962 年になって池田勇人内閣がガリオア資金という名の援助金を返済すると決定したことへ憤りを述べている。「むろん、食糧を放出したといっても、別にただであったわけではない。国民はこの配給に対しても政府のきめた代金を払った（……）しかも（1962 年）池田内閣は国民の税金の中からこの援助金をアメリカに返すと決めたのである。結局国民は十数年前に放出された食糧の代金をとられたあげく、もう一度支払いをさせられるわけである。」『わいふ』第 9 号 1963 年 7 月 20 日号、25–27 ページ。ガリオア資金（油井の著書に従えば援助）は初めから借款であったことは分かっていたのであるが、これは日本側がぼかしていたからではないかと考えられる。この「金曜会」報告記を書いた Y 女は米軍相手の慰安所問題へと論を勧めていったわけであるが、既に女性の視点からは、今日へと繋がるはっきりとした問題提起がいくつもなされていた点は評価に値するだろう。

(24) わいふ宝塚編集部編、『わいふ』第 67 号 1969 年 5 月 20 日号

(25) ポール・トンプソン、『記憶から歴史へ』。ポール・トンプソンは「記憶というのは個人的なものであると同時に社会的なものである。」としてフランスの社会学者モーリス・アルヴァックスが研究した個人の回想が集合的記憶の中でどのように影響を受けたのかについて論を進め、「集団的認識が問題になる時は記憶の正確さは、もはや中心的な焦点ではなくなる。」とした。

(26)『わいふ』第 67 号 1969 年 5 月 20 日号「土井多賀子さんを囲んで」、6–11 ページ所収。

(27)「せっかくの十周年誌なのだから「わいふ十年の歩み」なんていう記事がほしいわねと話が編集の時に出て。今からじゃ、どろなわ式になるけどなんとかまとめてみるわと気軽に引

き受けたものの、十年分のわいふをどさりと積み上げてみたら 30 cm になっていた。」が、「そしたら何のことはない。十年経った今のわいふと全く同じ様なことが書いてあるんよ。」わいふ編集部編、1993、『変わる主婦・変わらない主婦』、47–48 ページ

(28)『変わる主婦・変わらない主婦』、前掲書

(29)『変わる主婦・変わらない主婦』、前掲書

■参考文献

伊藤泰子、2012、「地域女性の生活と社会運動 ― 名古屋の保育所づくりを中心に ― 」『シリーズ　戦後日本社会の歴史 3　社会を問う人びと』岩波書店

見田宗介、1968、「社会意識論の方法」『社会学研究入門』東京大学出版会

高橋裕子、2005、「1946 ～ 50 年生まれの女性の「自分探し」」『立命館産業社会論集』立命館大学

ポール・トンプソン、2002、『記憶から歴史へ』青木書店

『VESTA』、2013 年夏号、味の素食の文化センター

わいふ宝塚編集部編、『わいふ』第 1 号 1963 年 11 月 20 日号

わいふ宝塚編集部編、『わいふ』第 2 号 1963 年 12 月 20 日号

わいふ宝塚編集部編、『わいふ』第 3 号 1964 年 1 月 20 日号

わいふ宝塚編集部編、『わいふ』第 9 号 1964 年 7 月 20 日号

わいふ宝塚編集部編、『わいふ』第 67 号 1969 年 5 月 20 日号

わいふ編集部編、1993、『変わる主婦・変わらない主婦』グループわいふ

ワイフ編集部編、2013、『Wife　2013. JULY. No.361』チーム wife

山中恒、2011、『昔ガヨカッタハズガナイ』勁草書房

油井大三郎・中村政則・豊下楢彦編、1994、『占領改革の国際比較 : 日本・アジア・ヨーロッパ』三省堂

国立社会問題研究所編、2002、「結婚年次別にみた、恋愛結婚・見合い結婚の構成比」『出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）』
http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou12/doukou12.pdf

『手持ちの時間を大切に』に「会員制女性誌『あごら』の休刊と斎藤千代さん」
http://lilac-tomo3.blog.so-net.ne.jp/2013-02-28

和田悠、2003、「1950 年代における鶴見和子の生活記録論」『社会学研究科紀要』第 56 号、慶應義塾大学大学院
http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/download.php?file_id=35972